会員自己紹介　No.7 「公共イメージ委員長　桐明　桂一郎」

公共イメージ委員長　桐明　桂一郎

職 業を通じて社会に奉仕、貢献する。職業奉仕はロータリーの土台とされている。しかし、問題は、その職業であろう。出来れば、子どものころから憧れ、夢見て いた、例えばサッカー選手とか宇宙飛行士になれれば一番、幸せかも知れないが、これは容易ではない。次は、自分に向いている、やりがいのある職業に出会え るかどうかだ。若いころ、就職や職業選択をめぐって迷い、悩んだ経験をした方も多いはずだ。

私は福岡県筑後地方の小さな農村で生 まれました。敗戦の時、国民小学校３年生でした。戦中戦後の混乱期で勉強どころではありません。当時、村では中学を卒業すると、長男は家業を継がされまし た。私も農家の長男として、家業を継ぐことになっていましたが、もう少し勉強したいという気持ちがあって父親に頼んで高校に進学させてもらいました。と いっても、昼間の高校ではなく、夜間の定時制高校です。

文豪、夏目漱石を知ったのも、その頃でした。最初に読んだ「坊っちゃん」 をきっかけに、すっかり漱石文学の虜になっていました。４年間の定時制の卒業時期が近づくに連れ、もっと上の学校に行って文学の勉強をしたいという願望が 膨らんできました。もちろん、父親は大反対でしたが、孫に甘かった祖父や祖母が応援してくれ、父親も最後は大学進学を認めてくれました。

卒業の年、九州大学を受験しましたが、まともな受験勉強をしていないのですから、当然のことながら不合格でした。ここで引き下がる訳にはいきません。「今 度、ダメだったらあきらめる」と、父親を説得し、１年間の猶予をもらいました。この間、昼間の農作業も免除です。長い人生の中で、この１年間ほど勉強した ことはありません。毎日、朝から夜中まで受験勉強に没頭しました。そして、昭和３２年春、九州大学に入学を果たしました。専門はもちろん、漱石と同じ英文 学を目指しました。

貧乏学生でしたが、学生生活は大いに楽しみました。仲間と同人雑誌を作り、小説まがいの作品を書いては作家気 分を満喫し、覚えたての麻雀に熱中したり、時には飲み友達と夜の歓楽街に繰り出し、馬鹿騒ぎをする。家庭教師の掛

け持ちなどアルバイトにも精を出していま したので、どうしても学業の方がおろそかになる。学期末の試験が近づくと、友人のノートを借り、にわか勉強でどうにかしのぐという有様でした。しかし、卒 業論文の方はどう頑張っても間に合わず、留年となりました。

留年生活が始まって間もないころ、福岡市内にあった夕刊専門の新聞社に就職していた大学の先輩から「どうせ暇だろうから、アルバイトしないか」と、誘われました。お金も欲しいし、喜んでＯＫです。

アルバイトといえばデスクや記者さんの使い走り、原稿運びぐらいだろうと思っていたが、この新聞社は違った。しばらくすると、デスクが「明日から西福岡署 に詰めてくれ」という。それまで警察の取材はもちろん、交通事故の記事一本、書いたこともない。そんなアルバイトに警察署をまかせようというのだから、こ ちらの方が不安になりました。

一応、警察担当の先輩から取材の仕方や記事の書き方などの指導を受け、「アルバイト記者」の活動が スタートしました。活動といっても、毎朝、刑事課や交通課などの課長席を、「何かありませんか」と、御用聞きみたいに回るのだが、返事は大抵「何もない よ」に決まっていました。夕刊各紙が届く夕方ごろになると、デスクから呼び出しの電話が掛かり、「夕刊見たか。抜かれとるぞ」と、怒鳴られる。普通、こん なしんどいアルバイトはやめたいと思うところだが、それが不思議なことに「俺も特ダネを抜いてやるぞ」と、逆にファイトが湧いてきます。そのうち、署員と も親しくなり、時には特ダネのお返しが出来るようになりました。

新聞記者の面白さ、やりがいといえば、まず第一に自分がどんな仕 事をしたかが毎日の紙面で決着がつくことでしょう。また、同じ情報、ネタにしても、その記者の取材力や視点の持ち方によって記事の深みや説得力にも差が出 てきます。同じ現場で取材していたのに、他紙の記事を見て「やられた」と悔しい思いをすることもあります。それに、最も大事なのは取材相手と信頼関係がな いと本物の取材はできないということです。信頼できる情報源をどれだけ持てるか、記者の大きな勝負どころです。１年足らずの記者体験でしたが、新聞記者と いう職業にだんだん魅力を感じるようになっていました。そして、卒業すると迷わず、その新聞社に入社しました。

入社翌年の昭和 ３８年４月、三井三池炭鉱で有名な福岡県大牟田市の支局に異動。その年の１１月９日、三川鉱で炭塵爆発事故が起きます。４５８人の死

者と多数の一酸化炭素 中毒患者を出す未曾有の大事故でした。新人記者の私は、遺体が次々に運び出されてくる三川鉱の坑口に張り付き、遺体の数を記録し、詰めかける遺族を取材す るよう命じられました。一週間余り、ほとんど不眠不休の状態でしたが、坑口で遺体にすがりつき、泣きくずれる遺族たちの姿が今も目に焼き付いています。こ の体験は、私にとって、その後の長い記者活動の原点になったように思います。

それから７年後、夕刊専門紙を退職、朝日新聞に入社 しました。東京本社社会部のデスクをしていた昭和６０年８月１２日、５２０人に上る死者を出す日航ジャンボ機墜落事故が起きました。真夏の暑い日、御巣鷹 山（群馬県）の事故現場を目指して大汗をかきながら山道を登ったことや麓の集落の体育館に所狭しと並べられた棺の間を、遺族の方たちが悲痛な面持ちで肉親 の遺体を捜しておられる姿を思い出します。何故か、ふと三川鉱の事故のことが頭に浮かび、よくよく大事故に縁があるものだと、鳥肌が立つような感慨を覚え たものでした。

振り返ってみると、私が新聞記者になったきっかけは、大学を留年したこと、新聞社に先輩がいてアルバイトに誘って くれたこと、そこで記者体験ができたことであり、どれか一つでも欠けていたら、記者にはなっていないでしょう。新聞記者という自分に向いた、やりがいのあ る職業に出会ったことで、３０年近く、それなりに充実した記者人生を送ることができました。ただ、事件や事故などの取材で、昼も夜もない生活が続いたり、 転勤、転居も多く、家族、特に子どもには苦労をかけたと思います。

さて、今の若者はどうでしょう。グローバル化で事業や雇用の在 り方も多様化しています。「ブラック企業」とか「若い人を使い捨て」といった記事を見ると、胸が痛みます。出来るだけ多くの若者が、ロータリーの基本であ る職業奉仕の心を育めるような立派な職業人になられるよう祈りたい。